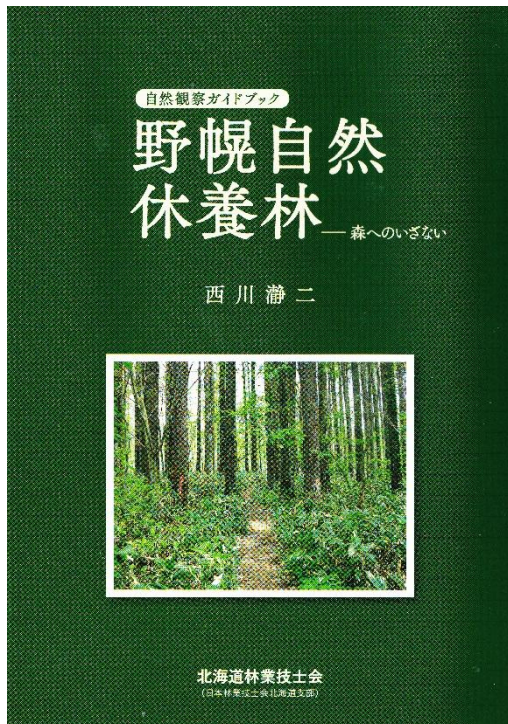


平成 26 年度前田一步園財団自然環境保全活動助成事業報告書

「自然観察ガイドブック野幌自然休養林―森へのいざない」の刊行事業は、北海道林業技士会が野幌自然休養林(カラマツ、エジマツ、モミジコース)をフィールドに、これまで約 10 年間、一般市民や江別市の野幌、上江別小学校の児童を対象にガイドをするため試行錯誤しながら勉強してきた内容をまとめたものです。このガイドブックの作成に当たっては、必要に応じて編集委員会を開催、植物については西川滯二、熊野美子、室野文雄の各氏が中心にまとめ、使用する写真については、北海道林業技士会の過去 10 年間の撮影記録と砂田隆、山口若生両氏の写真を選択使用しました。全体的なまとめは西川滯二氏が担当しました。

このガイドブックは、野幌自然公園の自然環境に興味を持つ人にとっては入門書となり、森林・林業にかかわる人たちにとっては、単なる林業技術のみならず、自然環境の保全問題についても広い視野から見る事が出来るような内容に工夫しました。

当ガイドブック構成と内容は概略以下のとおりです。



表紙

この本の活用にあたって

この本は、1 野幌森林公園の沿革、2 野幌自然休養林の主な植物、3 森の不思議発見の三部構成としました。どの部から入っても活用できるように構成しています。

1 野幌森林公園の沿革と現状

野幌森林公園の自然環境を語るとき、野幌森林公園の歴史を知ることが必要と思います。明治 41 年、野幌志文別(現登満別)の国有林内に北海道庁野幌林業試験場(現森林総合研究所)が開設されました。開設の目的は、明治以降の開拓に伴う森林伐採によって

荒廃した森林の早期復旧のための植栽樹種の試験研究でした。この野幌林業試験場の開設経緯とその成果である樹齢 100 年を超える人工林(国内外の樹種)と当時から保護していた素晴らしい天然林(広葉樹林)の現状をかいつまんで紹介し、森林観察に活用できるように編集しました。

2 野幌自然休養林の主な植物

和名の由来を最初に説明し、その植物の人々のくらし(歴史)とのかかわりや、エピソードも紹介し、その植物に親しみの持てる内容としました。

植物の種類を調べる(同定)にあたって、図鑑には互生、花序など耳なれない単語が出てきます。これらの単語の意味がわからないと前に進めない所以需要最小限のものについて図解しておきました。

植物分類は、これまで「花の形態」による植物分類で行っていましたが、最近、「遺伝子情報」による植物分類に変わりつつあります。当ガイドブックでは、草花編と樹木編については、これまでと同様の分類で整理していますがシダ編では新しい分類によって整理しました。

3 森の不思議発見

植物はそれぞれ、その環境に合わせて生きています。考えれば考えるほど不思議なことばかりです。その内容については、種ごとの説明の中で読み取っていただくことにして、これまで野幌小学校などの児童たちに「森の不思議発見」と題して話題にした内容について 2、3 の例を紹介・記載しました。

ー野幌森林公園の沿革よりー



現登満別駐車場近辺にあった野幌林業試験場の山祭りにエルネスチーネ夫人を伴って来場する4代目場長新島善直。

ー野幌森林公園の沿革よりー



野幌樹木園 プナ

ー草花編よりー

●シソ科

エゾタツナミソウ



名前の由来は、花の姿を葛飾北斎の浮世絵の波しぶき「立浪」に見立てたもの。北海道、本州中部以北の低地～山地の林内に生える多年草。花期は6～8月、花序は穂状、花色は淡紫。葉序は対生。



葛飾北斎画

ー樹木編よりー

●カバノキ科



和名の由来は、鶴飼の松明樺(うかしのたいまつかんば)が詰まってウダイカンバと呼ばれるようになったとされる。燃えやすく、雨の中でも消えないことで知られる。中国では樺の灯火を華燭と言ひ、途中で消えないので縁起が良いとされ、それが「華燭の典」の由来とされる。



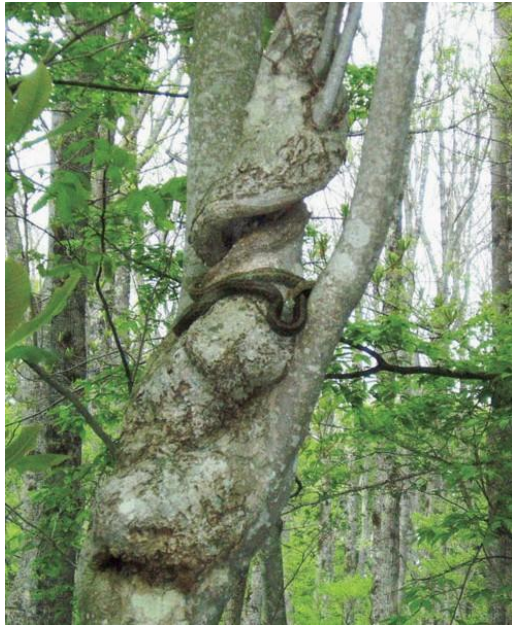
北海道、本州に分布。雌雄異株。陽樹で肥沃地を好んで生育し、高木となる。花期は5月、花色は淡緑、♂は黄褐、花序は尾状。葉序は互生。楽器(ピアノのハンマー)材、家具材、器具材、床板材など高級材として利用される。



河渡長村 | 鶴飼 (木曾御道六十九次) 溪斎英泉
作 旭川市博物館所蔵

一森の不思議発見より一

◇つるとホオノキ



2009 年の 5 月半ば、北海道林業技士会のメンバーと野幌小学校の「春の森の日」の下見に行った時のことである。メンバーの一人がコブの上に何か細長い黒いものを見つけた。よくみるとホオノキのコブに寝そべる青大将であった。夢中でデジカメのシャッターを押した。こちらが ゴソゴソ近寄っていったので、青大将が緊張してこちらを凝視していることが写真に於いて初めて分かった(フラッシュによって両目が光っている)。

このホオノキは現在、直径 20cm 位の木で、若い時代つるに巻かれ、何らかの理由によってつるが枯死し、そのつるを巻き込みながら肥大生長をしたものと考えられる。

なお、アオダイショウは野幌自然休養林で暖かくなる 4 月中旬から 5 月にかけて、登満別駐車場付近の広場や歩道でよく見かける。このアオダイショウは「日向ぼっこ」しに、この木に登ったようである。

一森の不思議発見より一

◇斜面に生える木のバランス

さまざまな生物の中でも木はとりわけ重たい生物である。傾斜地に生えた場所で種を発芽させ生長を始めた木はどうやってバランスをとっているのだろうか。

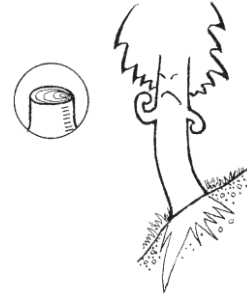
バランスをとる工夫は不思議なことに針葉樹と広葉樹では全く正反対なのである。

斜面の横に枝を伸ばした木は、やがて太陽の光を求めて上方に直立しようとして立ち上がる。そのとき、幹部分の細胞はどのようなになっているのだろうか。

針葉樹の場合は、木が傾いた斜面の下側の幹や根を太らせて、下から木を持ち上げるようにしてバランスをとる。

広葉樹の場合は、木が傾いた斜面上側の幹や根を太らせて、上側から木を引っ張るようにしてバランスをとっているのである(伐根の年輪のイラストを参照)。

それにしても木のたくましさには驚嘆するばかりである。下の写真の傾斜木は、直径 80cm を超える苔むしたミズナラの大木である。この大木の根は強固で、大きく地面と地下に張り巡らせ、木全体の重量をがっちりと支えているのである。



針葉樹



広葉樹

